

真理の囚人こそ真に自由の人なれ

奨励	山下 智子〔やました・ともこ〕
奨励者紹介	同志社女子大学現代社会学部准教授

イエスは、御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。「わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする。」

（ヨハネによる福音書 8章31―32節）

囚人が自由？

みなさんは、今、自由でしょうか。みなさんは、それぞれの毎日を本当に自由に歩んでいるといえるでしょうか。

『真理之囚人コソ真ニ自由ノ人ナレ』、これは説教・演説の原稿断片にある新島襄の言葉です（『新島襄全集』2 宗教編 同朋舎出版 1983年 451頁）。一瞬、「あれ？」と思われた方もいるのではないのでしょうか。囚人とは獄中に囚われている人のことですから、本来とても不自由な状況にあるはずです。

しかし新島は「真理の囚人こそ真に自由の人なれ」といいました。新島は私たちが本当に自由な人間となるためには、真理にこだわり、囚われる必要があることを教えてくれています。

「真正の自由を守るべし」

では、新島のいう「自由」とはどのようなものでしょうか。新島襄がいう「自由」がどのようなことか、理解を助けてくれる興味深いエピソードがあります。

あるとき京都・亀岡でキリスト教の演説会が開かれ、新島襄や、熊本バンドの山崎為徳、宮川経輝などが演説をしました。その夜の事です。演説会に参加した同志社関係者は宿の一室に枕を並べ泊まることになりました。この日の演説会はなかなかの盛会で、大勢の人が集まりましたので、皆くたびていたようです。

ところが、一人だけ、会の成功に興奮したのでしょうか、いつまでも大声で周りの人々に話しかけ、全く寝ようとしないう青年がいました。宮川経輝です。みんな眠くて仕方がないのに、宮川が寝かせてくれない。ほとほと困ったところで、新島襄がただ一言こう言いました。「真正の自由を守るべし」と。

さすがの宮川もこれにはハッと気が付かされたようです。たちまち部屋はシンと静まり、一同は安眠することができたといえます。（辻密太郎『我が霊的敵父』『新島先生記念集』同志社友会 昭和15年 241頁）

このエピソードからわかることは何でしょう。自由には「真正の自由」と、「偽りの自由」があるということです。私たちは、とすると「自由とは、自分の思い通りになんでもやりたい放題することだ」と考えがちです。しかし、宮川が「僕はまだ眠りたくない、もっとみんなとしゃべりたい」という思いでしゃべり続けた結果、何が起こったのでしょうか。周囲の人々の「私達はおうたくたです。はやく早く寝かせてください」という思いを大いに侵害することになったのです。

このような自由は単なる我儘であって、もはや自由とは言えない「偽りの自由」です。「真正の自由」ではありません。「真正の自由」は決して他者の自由を侵したり奪ったりするようなものではありません。

新島はもし「道徳ノ教立タサレハ」つまり自分の事ばかりで他者を思いやるような心が育つことなければ、「自由ヲ得ルモ又之ヲ我儘ニ用ユルノ憂アリ」と懸念しております。そして自由と「我儘」が一緒くたにされてしまうならば、「国ノ幸福期シ難〔ク〕、我儘起リ国家ノ滅亡ノ基礎トナルヲモ計リ難シ」（『新島襄全集』1 教育編 同朋舎出版 1983年 431頁）、つまり「人々の我儘で国が亡びるかもしれない」とまで言っているのです。

キリストの言葉にとどまる

どのようにしたら私たちは「真正の自由」を得ることができるのでしょうか。「真理の囚人こそ真に自由の人なれ」です。真理に囚われることにより私たちは「真の自由の人」となる事ができます。

では、新島がここで私たちがこだわるべきだと考えた「真理」とは具体的にはどのような事なのでしょう。

新島襄は、クリスチャンとしての生涯を歩んだ方ですので、自由に関するイエス・キリストの言葉から考えてみましょう。「イエスは御自分を信じたユダヤ人たちに言われた。『わたしの言葉にとどまるならば、あなたたちは本当にわたしの弟子である。あなたたちは真理を知り、真理はあなたたちを自由にする』」。

「真理はあなたたちを自由にする」と、今出川キャンパスの明徳館の入り口の斜め上に、ラテン語で刻まれている言葉でもあります。私たちはキリストの言葉にとどまることで真理を知り、真の自由を得ることができるとは。

では、私たちがとどまり、こだわるべきキリストの言葉とは何でしょうか。キリストは「最も大切な掟」として「神を愛すること」と「隣人を自分のように愛すること」をあげておられます（マタイによる福音書 22章37―39節）。またキリストはこうもいわれています。「わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である」（ヨハネによる福音書 15章12節）

つまり私たちがこだわるべきキリストの言葉とは、突き詰めれば、キリストが私たちを愛して下さるように、私たち同士が互いを敬い愛し合うことです。ここでいう愛とは、恋愛の愛とはもちろん少し異なります。むしろ相手を大切なかけがえのない大切なひとりとして大切にするというようなことです。新島の言葉ならば「人ひとりは大切なり」です。

キング牧師

なるほど、イエス・キリストの言葉にしたがい隣人を大切にすることで、与えられる「真正の自由」は、自分の利益のために隣人の自由を奪うような我儘勝手なものではないでしょう。それどころか、キリストがそうであったように自由を奪われ、苦しむ隣人たちのために行動することを自ら進んで選び取る面があります。

例えば、キリストの言葉に留まり、自由を奪われた隣人のために自ら積極的に行動した一人に、アメリカ公民権運動の指導者キング牧師がいます。キング牧師は有名な「I have a dream」の演説のなかで語ったように、「かつての奴隷の子孫と奴隷主の子孫」、つまり白人と、いまだ差別の中で不自由をしいられている黒人が、「兄弟愛のテーブルに一緒に座れるようになるであろうという夢」のために歩みました。キング牧師や仲間たちは、人種差別を撤廃するために、デモなど非暴力による平和的な抵抗運動を行いました。その結果としてキング牧師や仲間たちは、投獄されるなど理不尽な苦難を強いられましたが、ひるみませんでした。

キング牧師らがデモ行進の際にお互いに確認しあっていた10か条からなる約束があります。どれもキング牧師たちの志の高さが感じられる約束なのですが、その中に自由という語が出てくる約束が2つあります。「四、万人が自由になるために、神に用いられるよう、日ごとに祈れ」「五、万人が自由になるために、個人的願望は捨てよ」（梶原寿『み足の跡をたいて』新教出版社 2000年 59―60頁）

一般的には、公民権運動は虐げられた黒人たちが自由になるための運動であったと理解されます。しかし、それを担ったキング牧師たちは、「黒人が自由になるために」とは言うておりません。自分たちだけではなく、「すべての苦しむ人々が真に自由になるため」に公民権運動に取り組んでいたことがわかります。なるほど、キング牧師はその後、ベトナム戦争への反対運動に身を投じます。アメリカが国を挙げて戦っているときにそれに非を唱えることは、いわゆる「非国民」「国家の敵」になることですが、しかしキング牧師はベトナムの罪なき市民が戦争の犠牲になっていること、弱いものが強いものに虐げられ自由を奪われている状況に黙っていることは出来なかったのです。

ポジティブ・フリーダム

天才プログラマー、若き台湾のIT担当大臣と知られるオードリー・タンは、自由には「ネガティブ・フリーダム」と「ポジティブ・フリーダム」があるとしまず（クーリエ・ジャポン編『オードリー・タン 自由への手紙』講談社 2020年 2―3頁）。

タンは「ネガティブ・フリーダム」とは、「既存のルールや常識、これまでとらわれていたことから解放され、自由になること」だといいます。「いわば消極的な自由であり、これが自由への第一歩」だと考えます。

そして「ポジティブ・フリーダム」とは、そこから一歩進み、「自分だけでなく他の人も解放し、自由にしてあげること。みんなが自由になるにはどうすればいいのか、具体的なTo Doを考えること。自分の可能性を力に変え、その力を誰かのために役立てること」だとします。

さらに「本当に自由人って、どんな人ですか？」と聞かれたなら、「ポジティブ・フリーダムを体現している人」と答えるといいます。そして「自分が変えたいと思っていることを、変えられる人。自分が起こしたいと思っている変化を起こせる人。それこそ、自由な人です」、「自分が自由になるだけでなく、みんながみんなを自由にするために行動を起こせたら、すごいことです」とアドバイスします。

おわりに

新島襄は、江戸時代末期に生まれ、武士の息子は武士になるという封建制度に窮屈さを感じ、自由を求めて函館から脱国しました。そしてアメリカにわたり、神や隣人との出会い、学び、経験を通し、イエス・キリストの「私があなた方を愛したように互いに愛し合いなさい」との言葉にこだわるようになり、「真正の自由」を得ました。11月29日、創立記念日が近づいています。新島襄は単なる知識、頭の教育だけではなくキリスト教による徳育、心を育てることを目指し、この同志社を山本覚馬、宣教師のディヴィスら同志と共に創立しました。キリスト教により心を育てるとは、「互いに愛し合いなさい」とのキリストの言葉にこだわることにより、真理を知ることです。つまり新島の示す「真理の囚人」となることです。新島は、同志社において「真の自由の人」、隣人のために自ら進んで生きることを自由自在に選ぶことのできる人を育てることを目指しました。同志社スピリット・ウィークにあって、わたしたちは「真理の囚人こそ真に自由の人なれ」との新島の言葉から、私たちそれぞれの人生の歩みが、いかにあるべきかを問う者でありたいと願います。

2022年11月8日 同志社スピリット・ウィーク秋学期

今出川火曜チャペル・アワー「奨励」記録